

アート＆ケア研究部会（仮）設立準備会

Prepare meeting for the establishment of Art & Care Research Group(provisional)

アート＆ケア研究部会（仮）
Art & Care Research Group (provisional)

茂木 一司
MOGI Kazuji

1. はじめに

わたしたちは美術科教育の現状と今後を踏まえて、以下のような新しい研究部会を設置することを検討する会を持ちます。同様な関心や興味を持ち、志を同じくする会員の皆さんのご参加を広く呼びかけます。

○アート＆ケア研究部会(障がい児等の美術教育研究部会)（仮）設置趣旨

「障害者アート」に注目が集まる一方で、特別支援教育（盲聾養護学校）の美術教育研究は教員の定着等のさまざまな問題もあり、実践／研究の継続や蓄積ができず放置されたままである。美術科教育学会でも近年障がい児をテーマとする美術教育研究がみられるが、組織としての取り組みになっていない。障がい児の美術教育に興味を持つ研究者の集まる場をつくる。これが部会設立の最初の動機である。しかし、いざ障がい児の美術教育研究部会の枠組みを考えようとすると途端にひとつの「問い」が生じる。それは、そもそも障がい児の美術教育は「ワクのない or はずしていく（美術）教育」（小串里子）ではなかったのか？ということである。つまり、アートの持つ「表現」や「ケア」や「教育」の力を基盤にした美術教育の営みはもともと「インクルーシブでノーマライズな表現の学び」＝大変複合的で総合的な学びではなかったのか、ということである。障がい児の美術教育研究部会の在り方を問うことは、これまでにわたしたち自身が作りだした「美術教育」の「ワク」そのものに再考を迫ることでもあるのだ。

そこで、（とりあえず）わたしたちはアートを「生の身体技法」としてとらえ、外側（社会／世界…）に拓いていく活動として、この研究部会を開設していこうと思う。すなわち、それはこの場が障がい児の美術教育研究に限定しない、アートとケアの問題を広く考える学びのネットワークづくりになり、狭く固い美術教育を解体／再構築

する場にもなることを意味する。現在の特別支援教育の方向について言えば、作業（方法）の学習が支配する障がい児教育に一石を投じ、ことばで説明できないものの価値、目に見えないもの（プロセス）を視覚化し、伝えられることを研究する。障がい児の（美術）教育を特別扱いしない。「アートな学びのアートの学び」を支えられる場をつくっていきたい。

新研究部会設立準備会における検討事項（議題）

1. 部会の名称と設置趣旨の確認
例：みんなのための美術教育研究部会（Art Education for all 研究会）、美術教育のワクを超える研究会
2. 会則と研究内容等
3. 会員の集め方
4. その他

※当日ご参加の皆様にはご自身の抱える問題や実践、部会で研究していきたい課題などをお持ちください。資料をご持参くださる場合にはコピーをお願いします。なお、会員の集まりが悪かったり、合意形成が困難な場合には準備会を継続させるか、閉じる可能性もあることを申し添えます。